

第三章 紫上の物語(2) 若紫の君、源氏の二条院邸に盗み出される物語

[第一段 紫の君、六条京極の邸に戻る]

かの山寺の人は(ところで北山の尼上は)、よろしくなりて出でたまひにけり(病状も持ち直されて山寺を發って御出ででした)。京の御住処尋ねて(源氏は尼上の京屋敷を探し出して)、時々御消息などあり(時折に手紙を遣わせていらした)。同じさまにのみあるも(相変わらずの尼上の素気無い御返信に)道理なるうちに(何の進展も無いのは当然でも在りましたが)、この月ごろは(この数ヶ月は)、ありしにまさる物思ひに(藤壺宮との急展開に思い悩む内に)、異事なくて(ことごとなくて、其れ所ではなく)過ぎゆく(過ぎ去ってもいた)。

秋の末つ方(すゑつかた、終わりの九月頃)、いとも心細くて嘆きたまふ(源氏はひどく寂しく沈みがちだった)。月のをかしき夜(月の美しい夜に)、忍びたる所に(隠れ訪ねる女の所に)からうして(気乗り半分で)思ひ立ちたまへるを(出掛けてみたところ)、時雨めいてうちそそく(時雨だろうか颯と一雨あった)。おはする所は(出向く先は)六条京極(きやうごく、京の外周路つまり外れ)わたりにて、内裏よりなれば(御所から出てきたので)、すこしほど遠き心地するに、荒れたる家の木立いとも古りて(ふりて、長い年月で生い茂って)木暗く見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ(いつも御側を離れぬ惟光なるが)、

「故按察使大納言の家にはべりて、もののたよりにとぶらひてはべりしかば(先日ちょっと訪ねてみましたが)、かの尼上、いたう弱りたまひにたれば(ひどく御加減を悪く為されて御出でで、何ごともおぼえず(何も取り合えません)、となむ申してはべりし(というように話して御出ででした)」と聞こゆれば(と申し上げると、源氏は)、

「あはれのことや(御劳しい)。とぶらふべかりけるを(お見舞いに伺うべきであったものを)。などか(どうして)、さなむと(其の事を)ものせざりし(知らせずに居たのか)。入りて消息せよ(今から見舞うから、行って話を通してまいれ)」

とのたまへば(と仰るので、惟光は先に)、人入れて案内せさす(従者の一人を案内人に立てて前触れを告げさせた)。わざとかう(案内人には忍び通いの序ではなく態々この見舞いの為に源氏が当家に)立ち寄りたまへることと言はせられたれば、入りて(其の後で惟光が家に入って)、

「かく御とぶらひになむおはしましたる(今、殿がお見舞いにお見えになりました)」と言ふに、おどろきて(尼上の家人は驚いて)、

「いとかたはらいたきことかな(これは困ったことで御座います)。この日ごろ(ここ数日)、むげに(どうにも)いと頼もしげなく(ひどく御弱りに)ならせたまひにたれば(御成りあそばされて御出でなので)、御対面などもあるまじ(とても御目に掛かれますまいに)」

と言へども、帰したてまつらむはかしこしとて(御帰り頂くのは恐れ多いので)、南の廂(寢殿南正面廂の間を)ひきつくるひて(片付けて)、入れたてまつる(お迎え申し上げます)。

「いとむつかしげにはべれど(大変お見苦しい所で御座いますが)、かしこまりをだにとて(御挨拶だけでもと、存じまして)。ゆくりなう(行き届かない)、もの深き(里深い)御座所になむ(御席では御座いますが)」

と聞こゆ(と家人が申し上げる)。げにかかる所は(確かに源氏にしても此の様な所は)、例に違ひて思さる(見慣れないものと御思いに為る)。

「常に思ひたまへ立ちながら(いつも御見舞いをと思い立ちながら)、かひなきさまにのみ(相変わらずの)もてなさせたまふに(御返事でしたので)、つつまればべりてなむ(遠慮致しておりました)。悩ませたまふこと(具合が宜しくない事も)、重くとも(まして重く御成りとも)、うけたまはらざりける(承知仕らぬ)おぼつかなさ(不明さで御座いました)」など聞こえたまふ(などと源氏は御話しなされる)。

「乱り心地は(気分が優れませんのは)、いつともなくのみはべるが(何時と言って何時もの事で御座いますが)、限りのさまになりはべりて(いよいよ真近の今の折に)、いとかたじけなく(実に勿体無くも)、立ち寄せたまへるに(お立ち寄り頂きましたのに)、みづから聞こえさせぬこと(直接お礼も申し上げられませんで、お許し下さいませ)。のたまはすることの筋(仰せの件は)、たまさかにも(万一にも)思し召し変はらぬやうはべらば(御心が変わりません様でしたら)、かくわりなき(今の幼い)齢過ぎはべりて(歳を過ぎてから)、かならず数まへ(かずまへ、妻の数に入れて)させたまへ(下さいませ)。いみじう心細げに(全く頼りなく)見たまへ(思える若君を)置くなむ(残して逝くのが)、願ひはべる道の(成仏を願う尼僧の)絆し(ほだし、束縛=支障)に思ひたまへられぬべき(に思われてなりません)」など聞こえたまへり(などと尼上は申される)。

いと近ければ(ごく近い隣室で女房に言伝をしているので)、心細げなる御声(おんこゑ、尼上の声が源氏にも)絶え絶え聞こえて、

「いと、かたじけなきわぎにもはべるかな(まことに勿体無い源氏の君の御申し入れに御座います)。この君だに(せめてこの若君が)、かしこまりも(ちゃんと御挨拶)聞こえたまつべき(申し上げられる)ほどならましかば(程の歳であったなら、良かったのに)」

とのたまふ(と御話しされる)。あはれに聞きたまひて(源氏は尼上の言葉をしみじみとお聞きに為って)、

「何か(決して)、浅う思ひたまへむことゆゑ(思い付きなどで)、かう好き好きしきさまを(このような男女の申し入れを)見えたてまつらむ(致しては居りません)。いかなる契りにか(どういう御縁なのか)、見たてまつりそめしより(初めてお見掛けしたときから)、あはれに思ひきこゆるも(心に御留め申したのも)、あやしきまで(不思議なもので)、この世のことには(宿縁としか)おぼえはべらぬ(考えられません)」などのたまひて(などと御話し為されて)、「かひなき心地のみ(山寺以来お目にかかれず遣る瀬無い思いばかりを)しはべるを(しておりますので)、かのいはけなう(あの邪気ない君の)ものしたまふ御一声(可愛らしい御声を)、いかで(一声お聞かせ願えませんでしょうか)」とのたまへば(と仰ると)、

「いでや(いえ、それがもう若君は)、よろづ思し知らぬさまに(何も御存じないように)、大殿籠もり入りて(もう御眠りに成ってしまいました)」

など聞こゆる折しも(と女房が答えていた時に)、あなたより来る音して(奥から足音がして)、

「上こそ(御祖母上様)、この寺にありし(このまえ寺にいらした)源氏の君こそおはしたなれ(源氏の君が御出でに成っているんですって)。など見たまはぬ(なぜ御会いにならないの)」

とのたまふを(と幼君が言われるのを)、人びと(女房たちは)、いとかたはらいたしと思ひて(とても都合が悪く思って)、「あなかま(まあ喧しい=お静かに)」と聞こゆ(と申し上げる)。

「いさ(でも)、『見しかば心地の悪しきなぐさみき(御会いしたら病が幾分良くなった)』とのたまひしかばぞかし(と仰せになって御出でだったのに)」

と、かしこきこと聞こえたりと(山寺での浮かれ話を真に受けて源氏と会えば祖母様の容態が本当に良くなると子供心に思い遣って、自分は良い事を言っていると)思してのたまふ(思っ言い為さる)。

いとをかしと聞いたまへど(源氏はその幼さを面白くお聞きに為ったが)、人びとの苦しと思ひたれば(女房たちの気まずさを思って)、聞かぬやうにて(聞かなかった事にして)、まめやかなる御とぶらひを(誠実にお見舞いを)聞こえ置きたまひて(申し残されて)、帰りたまひぬ(お帰りに成った)。「げに(確かに)、言ふかひなのけはひや(まだ話に為らない様子ではあった)。さりとも(しかし)、いとよう教へてむ(よくよく育ててみよう)」と思す(と御思いに為る)。

またの日も(翌日もまた源氏は)、いとまめやかに(実に誠実に)とぶらひきこえたまふ(尼君にお見舞いの手紙を差し上げ為される)。例の、小さくて(中には例の様に小さな文を挟んで)、

「稚なき田鶴の一声聞きしより、葦間に泥む舟ぞ得為らぬ (和歌 5-18)

「追いかけてこなら負けないが、飛んで逃げたりしないでね (意識 5-18)

*この歌は聞き慣れない言葉が多いが、漢字を眺めると凡その情景は浮かぶ。読みは、「いはけなき たずのひとこゑ ききしより あしまになづむ ふねぞえならぬ」。「稚なき(いはけなき)」は幼い。「田鶴(たづ)」は鳥の「鶴(つる)」の異名で多くは歌語、とある。「鶴の一声」は其れが遠くまで響く事から<物事の決着を知らしめる事>や<注意の喚起>を意味する。「聞きしより」は<聞いたので>か<聞こえたが>。「葦間(あしま)」は葦の茂る沼地。「泥む(なづむ)」は<難儀する><滞る>。「舟ぞ」は<舟だから>と<助けなどは>。「得為らぬ(えならぬ)」は<並々ならぬ=一通りではない>と<得難い=無い>。詠まれた情景は、「鶴の声を聞いて幼鳥の姿を追ったが船は葦に足止めされてさっぱり探し回れない」となり、一般論としては「冬の訪れを感じるが雑事に追われて備えも尽ならない」という晩秋の情緒なのだろう。ただ此処では幼君に対して贈られた物なので、歌意も「鶴」を<若君>、「舟」を<源氏>と置き換えるだけで、情景と同様に<若君>に翻弄される<自分>を楽しげに歌っている、と解す。

*同じ人にや(ずっと思い続けていますよ) *原文注釈に依ると、「和歌に添えた引歌の文句。『源氏積』は「堀江漕ぐ棚なし小舟(たななしをぶね、波除の側板も無い丸木舟)漕ぎ返り同じ人にや恋ひわたりなむ」(古

今集 恋四 七三二 読人しらず)を指摘」、とある。引歌の本意は不明だが「同じ人」については、〈堀〉を何度も粗末な丸木舟で苦勞しながら〈漕ぎ返り〉して〈恋渡る=ずっと慕い続ける〉相手らしい。〈舟〉つながりで此の歌を引いたのだろう。尼上に心変わりや疑われたことに対する反意か、とある。

と、ことさら幼く(放し書きで)書きなしたまへるも、いみじうをかしげなれば(丁寧で美しかったので)、「やがて御手本に(そのまま若君の習字のお手本に為さると良い)」と、人びと聞こゆ(女房たちは話していた)。少納言ぞ聞こえたる(ただ、お返事は尼上ではなく少納言の乳母からもたらされた)。

「問はせたまへるは(お見舞い頂きました尼君の御方は)、今日をも過ぐしがたげなるさまにて(本日一杯も如何かという御容態で)、山寺にまかりわたるほどにて(これから山寺に移ろうかという所です、御挨拶は失礼致します)。かう問はせたまへるかしこまりは(本日のお見舞いへの御礼は)、この世ならでも聞こえさせむ(この世からとも限らず改めて申し上げたく存じます)」

とあり。いとあはれと思す(源氏は尼君がとても気の毒だった)。

秋の夕べは、まして、心のいとまなく(気忙しく)思し乱るる(罪深くも労しくも愛しくも慕い悩む)人の御あたり(ひとのおんあたり、藤壺と腹の子の安否)に心をかけて、あながちなるゆかりも(其の藤壺の御辺りのせめてもの縁故として兵部卿宮の娘なる幼君を)尋ねまほしき(其の様に考えて其の様にしたい)心もまさりたまふなるべし(気持ちを募らせていらしたのだろう)。

「*消えむ空なき(死に切れない)」とありし夕べ思し出でられて、(源氏は幼君が)恋しくも、また、見ば(実際に抱けば)劣りやせむと(藤壺宮に劣るか)と、さすがにあやふし(危惧された)。*「生ひ立たむありかも知らぬ若草を、おくらす露ぞ消えむ空なき(和歌 5-1)」と尼君が歌ったのを源氏が垣間見たのは、瘡病平癒の祈禱を受けるために半年前の三月晦日に北山へ出向いて、そこで偶々の様に見掛けた尼君御一行の和やかに寛いだ中に若君を見初めた時の夕べの事だった。そして其の時すでに源氏は若君を、「さても、いとうつくしかりつる稚児かな。何人ならむ。かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや(まあしかし実に可愛い女の子だったな。どういう謂れの子なんだろう。最愛の藤壺宮の代わりに見立てて日々の慰めに側に置きたいな)」と恋しく思っていた。ところが其の直後の四月初旬の短夜に源氏と藤壺は密会して情交を果たしてしまった。となると、若君を〈藤壺宮の代わりに見立てて日々の慰めに側に置き〉、あこがれの藤壺との情交を夢想して手淫を楽しむ、という目論見は破綻してしまっていた。今となつては若君を〈側に置きたい〉気持ちは逆に、若君の抱き心地を藤壺の性反応と見比べたい、という楽しみに変容している。そして其の事を、「さすがに(その様に為してみると)あやふし(如何なのだろうか)」と語られている。実に此処の件は、他に解釈の仕様も無く斯かる露骨な表現になっていて、今なら注釈を引きながら間を置いて聞けるが、語りを其の儘に感じ取った当時の人たちにとって斯様な生々しい語り口はどう響いたのだろうか。思わず、そんな事言っただけですか、と問い掛けたくなる。しかし亦一方では、源氏がこの若君を好色とは言え、正規の宮筋の後見にも些かの懸念は有るという、我流ながら其れなりの社会的妥当性を以って困り、藤壺への思いを手淫で遂げて済ませていれば、近親相姦の禁忌を犯す事も無く、畏れ多い帝に背信する事も無く、平らに過ごせてしまえるだけに、物語にはならないだろう。源氏の生い立ちに幾分の陰りが在ったとしても、決して免罪されない其の罪深さこそが、此の物語の生命線では在りそうだ。其れも序の桐壺の件から斯かる構想は示されていて、手淫で遂げ切れない男の思いなのか、其の女が居る宿縁なのか、が世の常だという作者の人間観察に基いて話が構築されている。更に斯かる作者の概念及び其の流布が時の一条天皇や藤原道長に支持

された事を思うと、人間社会の成り立ちや其の本質についての考察に於いて斯かる主題は、大きな岩盤に触れた感さえる。とまあ、それにしても幼子相手に是程イヤラシイ言い方をしたもんでしょうか。

「手に摘みていつしかも見む紫の、根にかよひける野辺の若草」(和歌 5-19)

「摘まんで見たら美味しそう、似た者同士の味比べ」(意識 5-19)

*源氏の独唱、というより是はもう他人に聞かせ様も無い戯言か。「紫」は色名だが、特に濃い紫色は皇室と公卿以外に着用を禁じられた禁色(きんじき)で、内親王だった藤壺宮を例えている、との事。また紫色の染色に紫草の根を用いた事から「根に通いける」と洒落て、藤壺宮と<血筋が通う>若君を「野辺の若草」に例えている。「いつしかも」は<早くしたい>で、「見む」は<睦む>だから、「いつしかも見む」は<早く抱きたい>となる。「手に摘みて」と上手く? 花摘みの歌に擬えるが、一般に<花摘みの歌>はそもそも<女遊びの歌>を意味する。つまり「藤壺と若君の二人ともを早く抱きたい」という脳天気な不届きぶりにしか見えない。

[第二段 尼君死去し寂寥と孤独の日々]

神無月(かむなづき、陰暦十月)に*朱雀院(すざくゐん)の行幸(ぎやうかう、天皇の外出)があるべし(あるようです)。舞人(まひびと、其の宴席での晴れ舞台で舞う人)など(などは)、やむごとなき家の子ども(皇族摂関家の子弟)、上達部(かむだちめ、三位以上の太政官)、殿上人(てんじゃうびと、四位以下五位以上の高級官僚)どもなども(たちなどから)、その方に(芸事に)つきづきしきは(長けた者を)、みな(其々に)選らせ(えらせ、帝の命で選び出し)たまへれば(為されたので)、親王達(みこたち)、大臣(だいじん)よりはじめて、とりどりの(各々の)オども(ざえども、演目を)習ひたまふ(稽古なさって)、いとまなし(大変でした)。 *朱雀院は、嵯峨天皇以後、代々の天皇の譲位後の住居とされた離宮。三条の南、朱雀大路の西にあって、8町を占めた(Yahoo 辞書)、との事。大内裏の朱雀門からだど 500mほど端まで遠く見ても 1km程の近さにある。朱雀院の行幸は園遊会。

山里人(やまざとびと、北山寺の尼君)にも、久しく訪れ(おとづれ、お見舞い)たまはざりけるを(為さらずに居たのを)、思し出でて(源氏は思い出されて)、ふりはへ(あらためて)遣はしたりければ(遣いをお立てになると)、僧都の返事のみあり(僧都の返事だけが在りました)。

「立ちぬる月の(先月の)二十日のほどになむ(二十日になります)、つひに空しく見たまへなして(尼御は遂に亡くなりまして)、世間の道理なれど(仏門なれば世の習いと承知はしております)、悲しび思ひたまふる(悲しく思っております)」

などあるを見たまふに、世の中のはかなさもあはれに、「うしろめたげに(亡くなった尼君が心残りのように)思へりし人も(お思いであった若君も)いかならむ(どうしている事か)。幼きほどに(幼いだけに)、恋ひやすらむ(恋しがっているかもしれない)。故御息所に後れたてまつりし(源氏は自分が幼少期に母君に先立たれた事)」など、はかばかしからねど(逐一ではないが)、思ひ出でて(思い出して)、浅からず(丁重な文を添えて)とぶらひたまへり(弔いの贈り物を遣わされた)。少納言、ゆゑなからず御返りなど聞こえたり(これには少納言の乳母なる女房が礼儀を心得た返事を遣してきた)。

*忌みなど過ぎて(若君が)京の殿になど(京の屋敷に戻っていると)聞きたまへば(お聞き為されて)、ほど経て(暫くしてから)、みづから(源氏ご自身で)、のどかなる夜おはしたり(晴れて風も無い夜に故按察使大納言邸に出向かれました)。*原文注釈に依ると、「『拾芥抄(しふがいせう、南北朝時代の百科便覧)』服忌部によれば、母方の祖父母死亡の際、二十日間忌み、三月間喪服を着る」、とある。尼君は九月二十日に亡くなっているのです、其の二十日余り後という、十月中旬以降の頃。

いとすごげに荒れたる所の(実に鬱蒼と荒れていて)、人少ななるに(人も少なく)、いかに(どれほど)幼き人恐ろしからむ(若君が怖がっていることだろう)と見ゆ(と思われる)。例の所に入れたてまつりて(源氏を以前と同じ寝殿南廂にお通しして)、少納言、御ありさまなど(尼君の葬儀他の事情を)、うち泣きつつ聞こえ続けるに(涙ながらにお聞かせ申し続ける内に)、あいなう(思わず源氏も)、御袖もただならず(涙する事只ならず)。

「*宮に(宮様のお屋敷に)渡したてまつらむ(若君が御移りになる)とはべるめるを(という事に為って居りますが)、『*故姫君の(故母君が宮の正妻を)、いと情けなく(本当に冷たくて)憂きものに思ひ(大嫌いと思って)きこえたまへりしに(御出ででしたので)、いとむげに(まるっきりの)児ならぬ齡の(ちごならぬよはひの、幼児でもなく)、まだ(かといって)はかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず(しっかりと人の意向をお分かりにもならず)、中空(なかぞら、中途半端)なる御ほどにて(なお年頃の若君ですので)、あまたものしたまふなる中の(沢山の人が居る御邸の中で)、侮らはしき(あなづらはしき、侮られ易い=馬鹿にされ)人にてや(ながら)交じりたまはむ(過ごされるものかと)』など、過ぎたまひぬるも(亡くなられた尼上も)、世とともに(死ぬまで)思し嘆きつること(御心配なされていたのも)、しるきこと多くはべるに(其の恐れは大いに御座いますので)、かく(このように)かたじけなき(勿体無くも)なげの(御冗談にしても賜った)御言の葉は(若君御引取りの御申し込みは)、後の御心もたどりきこえさせず(今後の御気持ちは如何であれ)、いとうれしう思ひたまへられぬべき(大変光榮に存じ上げる)折節にはべりながら(所では御座いますが)、すこしもなぞらひなるさまにも(若君はととも殿のお相手に適うようには)ものしたまはず(在らせられず)、御年よりも若びてならひ(御歳の割りには無邪気にして)たまへれば(いらっしゃいますので)、いとかたはらいたくはべる(なんともお恥ずかしい次第で御座います)」と聞こゆ(と少納言)。*「宮」は若君の父たる兵部卿宮。*「故姫君」は若君の亡くなった母。

「何か(何をまた)、かう繰り返し聞こえ知らする心のほどを(こう繰り返し御伝え御示してきた申し入れを)、つつみたまふらむ(御遠慮なさるのでしょうか)。その言ふかひなき(その恋文も交せないほどの)御心のありさまの(若君の幼さを)、あはれにゆかしうおぼえたまふも(愛しく労しく私が感じるのも)、契りことになむ(この縁が特別なものと)、心ながら思ひ知られる(尽々考えさせられる所なのです)。なほ(もう此の上は)、人伝てならで(人伝てではなく)、聞こえ知らせばや(若君に直接御話し申し上げたい)。

あしわかの浦にみるめはかたくとも、こは立ちながらかへる波かは (和歌 5-20)

優しく為るから大丈夫、ゆっくり緩ぐせば解ける固紐 (意識 5-20)

*まずは原文注釈に頼ると、「源氏の贈歌。『奥入』は「あしわかかの浦に来寄する白波の知らじな君は我は言ふとも」（古今六帖五 言ひ始む）を指摘」とある。注釈に、「わか」は「葦若（あしわか、葦の若芽）」と「和歌浦（わかこのうら、和歌山市南部の景勝地）」の掛詞、ともあって、「あしわかこのうら」で〈若い美女〉を示す定型句に成っているらしい。此の引歌も本意は不明だが「来寄する白波（きよするしらなみ）」は〈言い寄る男たち〉に見えるから、「若く美しい貴女には言い寄る男が多いから私の真心が分からないのしょう」という恨み節か口説き文句かの常套句めいた字面に読める。源氏の歌は是を下敷きに一工夫している。一工夫とは、「みるめ」を「見る目（眺め、若しくは、娶る）」と「海松布（海草）」、「とも」を〈そうであっても〉と〈そうであったならば〉、とに掛けて詠んだ事。依って、「あしわかこの浦にみるめはかたくとも」は〈和歌の浦には葦の若布が生えていて海松布は育たないようだから〉、「こは立ちながらかへる波かは」は〈この浜辺は波が立ち寄せても静かに引いてゆくのだろう〉、となつて穏やかな情景を歌っている。と同時に、「若君が娶るには幼すぎるからといって、このまま私に立ち返れと言うのですか」という字面が読める。こう見ると如何にも尤もらしいが、それだけの事を言うのに「浦」と歌い出して、〈海辺の情景〉を持ち出すのは些か唐突に感じる。確かに「生憎の嵐で折角の名勝が見えない」とも解せるので残念な思ひは重なるが、山寺で見かけた少女に贈る歌に海辺は腑に落ちない。源氏の歌意が見えて来ない。また出たか、在庫選り！で、例によって語意分析を試みる。差し当たり、「かたく」は〈難く〉と〈硬く〉とに掛かりそうに「みるめはかたく」について見てみると、動名詞の「見る目」の方は〈見辛い〉で、普通名詞の「ミルメ」の方は〈ミルメが硬い〉と読める。後節については、「たちながら」は〈立ったけれども〉と〈立ったまま〉、「かへるなみ」は〈変える成る身－省みる身〉と〈返る畝り〉で、「こはたちながらかへるなみかは」とは〈この場は立ったものの身を修める事にしようか〉または〈此処は立ったまま畝りを繰り返そうか〉、となる。が此処まででは、まだ何の事を言っているのか、今一つ良く分からない。いやもう分かったが、是を枕絵の詞書に見立てると、俄然写実性を持つ。「海松布」も「若布」も海草は陰毛の異名だし、海草を付けた貝が見た目も磯の香りも女性器そのものとされることから、是等も延いては〈アソコ〉を指す。其れに対する「見る目」は〈目交い〉であり、睦みの情交を示す。となれば、「たち」は勃起であり、男根の〈勃ち〉を言う。そこで一意は、「幼過ぎて事に及び難ければ無理強いはしません」、と大人しい。しかし亦一意は、「固い苔みでも何度も突いて濡らして見せましょう」、と勇ましい。いよいよイヤラシサが発揮されて、と言う事は、趣きある風情を以て歌意が浮かび上がった。などと口説々々しいが、「ミルメ」を初めから其れと知れば、この歌のイヤラシサは直感的だ。少納言などは其の場で疼と来たのではないだろうか。

めざましからむ（私が若君を、*目覚めさせてみせましょう）」とのたまへば（と源氏が御話しになると、少納言は）、 *是は少納言の返事を先取りした裏意で、表意は「変でしようか」と少納言に振っているが、少納言に対しては表意の方がイヤラシイ。

「げにこそ（ですから）、いとかしこけれ（其れこそが恐れ多くて）」とて、

「寄る波の心も知らでわかこの浦に、玉藻なびかむほどぞ浮きたる（和歌 5-21）」

「貴方の色に染まるのが、私の幸せなのかしら（意識 5-21）」

*「寄せる波がどんな遠い沖まで引くのか分からないが、和歌の浦に浮かぶ小さな藻は其の波に身を任せて漂っている」という情景詠みで、この情景自体は深い趣を持っている。長閑に見える景色もゆっくりと然し大きな畝りに依って次第に姿を変えて行く、という事象は実に多くの示唆に富む。ま、其れは其れとして此処では、源氏の歌意に対する返歌としての意味を受け止めて置きたい。「寄る波の」は〈言い寄る男の〉。「心も知らで」は〈本心も見抜けず〉。「和歌の浦に」は〈和歌の＝恋歌に〉×裏に＝返して＝応じて〉。「玉藻なびかむ」は〈女は気も漫ろに〉。「浮きたる」は〈待つ

ている)。さらには枕絵風のほろ酔い気分で、「口説き文句は耳元に、指はおぼこの口元に」、と少納言が答えたらと想像しただけで楽しい。

わりなきこと(*困ります)」 *「そんなこと言っちゃイヤ」や「こんなこと言わせちゃイヤ」を女房らしく堅苦しく答えたのだとしたら可なり色っぽい。

と聞こゆるさまの馴れたるに(と若君に成り代わって応える少納言の心得た様子に)、すこし罪ゆるされたまふ(源氏は少なからず救われた気に御成りに為られた。そして、)。「*なぞ越えざらむ(いつか果たして見せよう)」と、打ち誦じ(うちずじ、古歌を口ずさみ)たまへるを(為さるのを遠巻きにしていた)、身にしみて若き人びと思へり(若い女房たちは其の艶やかさに身体の芯が震える思いだった)。*原文注釈に依ると、「人知れぬ身は急げども年を経てなど越えがたき逢坂の関」(後撰集 恋三 七三一 伊尹朝臣)の文句を変えて口ずさんだもの、とある。「逢坂関(あふさかのせき)」は其の名から逢瀬を阻むもの>の意で歌枕に使われた、という。「関」自体は山城と近江の国境の検問所で、京都から見て東国との関であった。歌は何が「関」で何が「年」なのかで意味が変わるが、文脈としては「早く会いたいのになかなか会えない」事に違いは無いのだろう。源氏を変えたのは「など越えがたき(まだ越えられぬ)」を「なぞ越えざらむ(どうして越えずに居られようか)」とした所。

君は(ところで若君は)、上を(亡くなった御祖母上を)恋ひきこえたまひて(恋しがられて)泣き臥したまへるに(泣き臥していらしたが)、御遊びがたきどもの(御遊び相手の童女たちが)、

「直衣(なほし、貴族男子の平服)着たる人のおはする(姿の人が居らする)、宮のおはしますなめり(宮様が御越しなのでしょう)」

と聞こゆれば(と言ったので若君は)、起き出でたまひて(起き出されて)、

「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら(直衣の方は何処)。宮のおはするか(宮様がいらっしゃるのですか)」

とて(と言って)、寄りおはしたる御声(少納言の乳母の許へ寄って御出でになる御声が)、いとらうたし(とても可愛らしい)。

「宮にはあらねど(宮様では御座いませんが)、また思し放つべうもあらず(そう懸け離れた方でも御座いません)。こち(此方へ御出でませ)」

とのたまふを(と少納言が答えると若君は)、恥づかしかりし人と(山寺の源氏帰参時の祝宴で源氏の典雅さを見知って以来に気恥ずかしく存じ上げ、御祖母上の御見舞いなどの気配で遠からずとも感じていた御方だと)、さすがに聞きなして(さすがに気付かれて)、悪しう言ひてけりと思して(いけない事を言ってしまったかの様に)、乳母にさし寄りて(乳母にひた寄って)、

「いざかし(さあもう)、ねぶたきに(眠いから)」とのたまへば(と言いなされば源氏が)、

「今さらに、など忍びたまふらむ(なぜお隠れ為される)。この膝の上に大殿籠もれよ(この膝の上で御寝み為されよ)。今すこし寄りたまへ(さ、もう少し近くに)」

とのたまへば(と仰ると)、乳母の、

「さればこそ(とまあ)。かう世づかぬ御ほどにてなむ(この通りのお子様で御座います)」

とて(と言って源氏の方に若君を)、押し寄せたてまつりたれば(押し寄せて差し上げると若君は)、何心もなくみたまへるに(そのまま几帳の前にお座り為されたので源氏は)、手をさし入れて探りたまへれば(几帳の下から手を差し入れて若君を探し為されたが)、なよらかなる御衣に(柔らかなお召し物に)、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる(その髪の端のふさふさした所に手が触れて)、いとうつくしう思ひやらる(とても可愛らしく思い遣り為さる)。手をとらへたまへれば(源氏が若君の手を御取りに為ると)、うたて例ならぬ人の(不意に余所の人が)、かく近づきたまへるは(このように近付きなさるのは)、恐ろしうて(気味悪く)、

「寝なむ、と言ふものを(眠いと言ってるのに)」

とて(と言って若君が)、強ひて(後ずさりして)引き入りたまふにつきて(手を引っ込めたのに釣られる様に)すべり入りて(源氏は几帳の中に滑り込んで)、

「今は、まろぞ思ふべき人(私こそを頼り為され)。な疎みたまひそ(御避け為されますな)」

とのたまふ(と御話しなさる)。乳母、

「いで(あら)、あなうたてや(まあ大変)。ゆゆしうもはべるかな(何という事で御座いましょう)。聞こえさせ知らせたまふとも(お取次ぎ申し上げようにも)、さらに(これでは)何のしるしも(何も執り成し様が)はべらじものを(無くなってしまいましたように)」とて(と言って源氏の厚かましさに)、苦しげに思ひたれば(困っていたので源氏は)、

「さりとも(何も此処で)、かかる御ほどをいかがはあらむ(このような幼子を如何かしようと言う事はありません)。なほ(ただ)、ただ世に知らぬ(ありふれたものではない)心ざしのほどを(私の思いの深さを)見果てたまへ(分かって下され)」とのたまふ(と述べ為さる)。

霰(あられ)降り荒れて、すごき夜のさまなり(悪天候の夜でした)。

「いかで(どうして)、かう人少なに(このような人の少ない所に)心細うて(心細くして)、過ぎしたまふらむ(お過ごし為されましようか)」

と(と源氏は)、うち泣いたまひて(涙ながらに同情為されて)、いと見棄てがたきほどなれば(とても見捨てては置けないほどだったので)、

「御格子参りね(みかうしまゐりね、格子戸を降ろしなさい)。もの恐ろしき夜のさまなめるを(もの恐ろしげな夜なので)、宿直人にてはべらむ(私が宿直当番を務めましょう)。人びと(女房方の皆さんは)、近うさぶらはれよかし(此処に集まれば良いですよ)」

とて(と言って)、いと馴れ顔に(まるで慣れた事のように)御帳のうちに入りたまへば(若君と一緒に御帳の内に入ってしまったので)、あやしう思ひのほかにもと(其の不躰な為さり様の余りにももの意外さに)、あきれて、誰も誰もみたり(一同唾然としていた)。乳母は、うしろめたなう(極まりの悪い)わりなしと思へど(困った事と思ったが)、荒ましう聞こえ(殊更に源氏を非難して)騒ぐべきならねば(事を荒立てるのも憚られたので)、うち嘆きつつみたり(ただただ嘆いているばかりだった)。

若君は、いと恐ろしう(源氏にととても怯えて)、いかならむとわななかれて(どうなるものかと不安に震えて)、いとうつくしき御肌つきも(とても瑞々しい肌を)、そぞろ寒げに思したるを(悪寒を覚えて鳥肌立てて居られるのを)、らうたくおぼえて(源氏は労しく思つて若君に)、単衣ばかりを押しくくみて(薄衣一枚を掛け加え抱き包んで)、わが御心地も(我ながら)、かつはうたておぼえたまへど(この中途半端な添寝に幾分奇妙な気分にもなりながら)、あはれにうち語らひたまひて(優しく話し掛け為されて)、

「いざ、たまへよ(私の家に来て見ませんか)。をかしき絵など多く(面白い絵も沢山あるし)、雛遊びなどする所に(御人形さん遊びも出来ますよ)」

と、心につくべきことをのたまふけはひの(若君の気を引けそうなことを仰る源氏の様子を)、いとなつかしきを(若君はととても親身に感じて)、幼き心地にも(子供心にも)、いといたう怖ぢず(そう無闇に怖気付かず)、さすがに(といつても矢張り)、むつかしう寝も入らずおぼえて(不安で寝付けない気持ちで)、身じろき臥したまへり(縮込まって横に為っていなされた)。

夜一夜(よひとよ、一晚中)、風吹き荒るるに、

「げに(本当に)、かう(こう)、おはせざらましかば(殿がお見えで無かったら)、いかに心細からまし(どんなに心細かったかしら)」

「同じくは(同せなら)、よろしきほどにおはしまさましかば(若君がお年頃で在らせられれば、宜しかったのにね)」

とささめきあへり(と女房たちはささやき合っていた)。乳母は、うしろめたさに(御帳の中の若君に源氏が悪戯しないかと気になって)、いと近うさぶらふ(ごく近くに控えていた)。風すこし吹きやみたるに(風が少し収まって)、夜深う出でたまふも(まだ朝の暗い内にお帰りに成る源氏は)、ことあり顔なりや(思いを遂げた女と別れるような未練たっぷりの面持ちであった)。

「いとあはれに(こう親しく)見たてまつる(目直に致しました)御ありさまを(若君を)、今はまして、片時の間もおぼつかなかるべし(片時も猶然りに出来ようか)。明け暮れ眺めはべる所に渡したてまつらむ(いつも目の届く所に御移し致したい)。かくてのみは(このまま此処にいらして

は)、いかが(いけません)。もの怖ぢしたまはざりけり(若君が怖がって御出でですから)」とのたまへば(と源氏がお話に為ると少納言は)、

「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど(宮様も御迎えなさる様に承っておりますが)、この御四十九日(おんなななぬか)過ぐしてや(過ぎてからの事と)、など思うたまふる(存じます)」と聞こゆれば(と申せば源氏は)、

「頼もしき筋ながらも(宮様は立派なお家柄ですが)、よそよそにてならひたまへるは(別々に暮らして来られたのだから)、同じうこそ疎うおぼえたまはめ(お屋敷が不慣れな事については私の所と変わりますまい)。今より見たてまつれど(これから一緒に暮らすなら)、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ(私の深い思いが宮様に劣るとも思えません)」

とて(と言って)、かい撫でつつ(若君の御髪を掻き撫でながら)、かへりみがちにて出でたまひぬ(何度も振り返って別れを惜しみながらお帰りに成りました)。

いみじう霧りわたれる(深く霧の立ちこめた)空もただならぬに(空も一段と趣があつて)、霜はいと白うおきて(道には霜が下りて)、まことの懸想も(情に濡れた朝帰りの風情としても)をかしかりぬべきに(如何にも相応しく感じて)、さうごうしう思ひおはす(子守の夜明かしが物足りなくも思われた)。いと忍びて通ひたまふ所の道なりけるを思し出でて(すると源氏は此処の道が忍び通いの女の一人の家に通じている事を思い出され、門うちたたかしたまへど(従者に其の家の門を叩かせ為されたが)、聞きつくる人なし(聞き付けて出てくる者も無い)。かひなくて(そこで)、御供に声ある人して(供の中で声の良く通る者に)歌はせたまふ(こう歌わせ為さる)。

「朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも、行き過ぎがたき*妹が門かな」(和歌 5-22)

「曙の霧の深さに戸感えば、情け恋しい懐かしい人」(意識 5-22)

*「妹が門(いもがかど)」は催馬楽にある古謡で<行きそびれて気まづくなつた思い人に雨宿りに託けて寄りを出したい>と言う歌らしい。此処の場面で之の歌とは余りにもベタだが、情感ある風情とは思ふ。ま、当時の宮廷人の素養と言うか常識が前提なのだろうから、此処では「ちょっとお寄り致します」をちょっと気を利かせて言つてみた、という所か。

と、二返り(ふたかへり、復唱)ばかり歌ひたるに、よしある(心得た)下仕ひ(しもづかひ、貴家の下女)を出だして(を出してきて)、

「立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは、草のとざしにさはりしもせじ」(和歌 5-23)

「何処を如何して戸感えば、馴染みの道を迷い込むやら」(意識 5-23)

*「立ち止り(立ち止まって)霧の間垣の(霧の中の垣根を)過ぎ憂くは(通り過ぎたくないと思つたのなら)草の戸閉しに(草が道を塞いでも)障りしも(邪魔には)為じ(ならないでしょう)」というのが、ほぼ直訳か。<入る気ならさつさと入れれば良いのに、冷かし御断り>という気分、との注釈も在つた。振りの「妹が門」を「霧のまがき」と受けて「草の戸ざし」へ継げる。「憂く」を「障りしもせず」と落ち着かせる、といった所が要点か。「草のとざし」は歌語で、粗末

な家を言うらしい。整理すれば、「何時だって霧に浮かんだ垣根が目止まったら、粗末な家に遠慮はいりません」、と言った所かと思うが、言い回しも情景も特に如何とも。

と言ひかけて(と言ったきりで)、入りぬ(引っ込んだ)。また人も出で来ねば(其の後は誰も出てこない)、帰るも情けなけれど(そのまま通り過ぎるのも芸が無いような気もしたが)、明けゆく空もはしたなくて(だんだん辺りも明るくなってきて人目も憚られたので)殿へおはしぬ(二条院に引き上げる事に為さいました)。

をかしかりつる人の(可愛らしかった若君の)なごり恋しく、独り笑みしつつ臥したまへり。日高う(遅い朝に)大殿籠もり起きて(お起きに為られて)、文やりたまふに(若君への手紙をお遣りになるのに)、書くべき言葉も例ならねば(子供相手の文となると)、筆うち置きつつ(筆も休み休み)すさびゐたまへり(書き進めて居なされた)。をかしき絵などをやりたまふ(そして面白い絵などを付けて送り為された)。

かしこには(若君の屋敷の方には)、今日しも(今日ちょうど)、宮わたりたまへり(父宮様がお見えになっていた)。年ごろよりもこよなう荒れまさり(屋敷は以前よりもずっと痛みが進んで)、広うもの古りたる所の(広くて古びた所に)、いとど人少なに久しければ(ごく少人数で住んでいるのが長くなっていたので)、見わたしたまひて(宮様は屋敷を見渡し為されて)、

「かかる所には(こんな所には)、いかでか(どうして)、しばしも幼き人の過ぐしたまはむ(少しも幼子が過ごされようか)。なほ(やはり)、かしこに(私の邸に)渡したてまつりてむ(御移し致そう)。何の所狭きほどにもあらず(少しも狭苦しい事は無い)。乳母は、曹司などしてさぶらひなむ(部屋を設えて住めばよい)。君は、若き人びとあれば(若君は子供が大勢居るので)、もろともに遊びて(一緒に遊んで)、いとよう(仲良く)ものしたまひなむ(暮らして行けるだろう)」などのたまふ(などと仰る)。

近う呼び寄せたてまつりたまへるに(そして若君を近く御呼び寄せに為ると)、かの御移り香の(あの源氏の移り香が)、いみじう艶に(とても艶やかに)染みかへらせたまへれば(香り立ったので兵部卿宮は)、「をかしの御匂ひや(良い匂いだ)。御衣はいと萎えて(服は大分くたびれているが)」と、心苦しげに思いたり(若君を可哀相にも感じなされた)。

「年ごろも(ずいぶん長く)、あつしく(病気がちの)さだ過ぎたまへる人に(年老いた人と)添ひたまへるよ(暮らして来たものですね)、かしこにわたりて(我が家に移って)見ならしたまへなど(妻とも慣れ親しんでおくようにと)、ものせしを(言っていたのだが)、あやしう疎みたまひて(御祖母様は妻を嫌って遠ざけ為されたので)、人も心置くめりしを(妻の方も張り合っていたようだが)、かかる折にしも(御祖母様が亡くなったからといって)ものしたまはむも(お連れ申すのも)、心苦しう(気が引けるが)」などのたまへば(など御話しなされると少納言は)、

「何かは(何もそんな、お急ぎに為る事も御座いません)。心細くとも(若君は心細いかもかもしれませんが)、しばしはかくておはしましなむ(暫くは此の儘でお過ごし為されて)。すこしものの心思し知りなむに(もう少し物心が付いてから)わたらせたまはむこそ(御邸にお移りあそばされた方が)、よくははべるべけれ(宜しいかと存じます)」と聞こゆ(と申す)。

「夜昼恋ひきこえたまふに(夜も昼もお祖母様が恋しくて泣いてばかりいらっしやいまして)、はかなきものもきこしめさず(召し上がり物なども少のうございます)」

とて(とも言っていて)、げにいといたう面瘦せたまへれど(若君は本当にとてもひどく顔がお瘦せになっていたが)、いとあてにうつくしく(其れが亦上品で美しく)、なかなか見えたまふ(かえって素晴らしくお見えになる)。

「何か、さしも思す(どうしてそんなに悲しがられ為さる)。今は世に亡き人の御ことはかひなし。おのれあれば(私が居るではないか)」

など語らひきこえたまひて(父宮は若君にそう御話しになって)、暮るれば帰らせたまふを(日が暮れたので帰ろうと為さると若君が)、いと心細しと思ひて泣いたまへば(とても寂しがつてお泣きになるので)、宮うち泣きたまひて(宮も涙されて)、

「いとかう思ひな入りたまひそ(そんなに強く思いこまれ為さるな)。今日明日(けふあす、ごく近い内に)、渡したてまつらむ(御移し致そう)」など、返す返すこしらへおきて(何度も若君を宥めながら)、出でたまひぬ(屋敷を後にされた)。

なごりも慰めがたう泣きあたまへり(若君は其の後は慰めようも無く泣き続けて居らした)。行く先の身のあらむことなど(将来の身の立て方など)までも思し知らず(まで思いもせず)、ただ年ごろ(ただ長年)立ち離るる折なう(側を離れることなく)まつはしならひて(纏い付き為されていた御祖母上が)、今は亡き人となりたまひにける、と思すが(と御思いに為るのが)いみじきに(悲しくて)、幼き御心地なれど、胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、昼はさても紛らはしたまふを、夕暮となれば、いみじく屈し(くし、屈み込んで泣き)たまへば(為さるので)、かくてはいかでか過ごしたまはむと(これでは普通に暮らしていけないと)、慰めわびて(若君を慰めようも無く)、乳母も泣きあへり(乳母も泣き合った)。

君の御もとよりは(この日、源氏の御邸からは)、惟光をたてまつれたまへり(若君の屋敷に惟光を差し向け為された)。

「参り来べきを(私が伺うべき所ですが)、内裏より召あればなむ(帝からのお呼び出しがありましたので、参れません)。心苦しう見たてまつりしも(お勞しく存じておりますが)、しづ心なく(気忙しく)」とて(と源氏は惟光に伝言させて、また惟光を自身の身代わりの)、宿直人たてまつれたまへり(宿直番として差し向け為されたわけであった)。

「あぢきなうもあるかな(厭な為さり様だこと)。戯れにても(遊び半分にしても)、もののはじめに(結婚当初から)この御ことよ(代理遣いですとは)」

「宮聞こし召しつけば(宮様がお耳にされたら)、さぶらふ人びとの(側仕えのわたしたち女房が)おろかなるにぞさいなまむ(だらしないと叱られてしまう)」

「あなかしこ(あらいやだ)、ものものついでに(はずみで)、いはけなく(うっかり)うち出できこえさせたまふな(源氏の君の事を宮様にお話に為りませんように)」

など言ふも(などと女房たちが言うのも)、それをば何とも思したらぬぞ(若君は其れを何の事かお分かりに為らないのが)、あさましきや(困るところです)。

少納言は惟光に、あはれなる物語どもして(打ち明け話を幾つかして)、

「あり経て後や(いつの日にかは)、さるべき御宿世(殿との御縁に君が)、逃れきこえたまはぬやうもあらむ(逃れ致し為されない様に成るのかもしれませんが)。ただ今は、かけても(些かといえども)いと似げなき御ことと見たてまつるを(まるで不釣合な事と存じまして)、あやしう思し(殿の熱心に思い)のたまはするも(仰せになる婚儀が)、いかなる御心にか(どのようなお考えに依るものなのか)、思ひ寄るかたなう乱れはべる(思いあぐねて困っております)。今日も、宮渡らせたまひて(宮様がお見えに成って)、『うしろやすく仕うまつれ(君の将来を考えてお世話せよ)。心幼く(迂闊に男を)もてなしきこゆな(近付け致すな)』とのたまはせつるも(と仰せ付けられました時も)、いとわづらはしう(ひどく気掛かりで)、ただなるよりは(普段と違って)、かかる御好き事も(殿の昨夜の慣れ事も)思ひ出でられはべりつる(思い出されて御座います)」

など言ひて(などと言ったが、言い方次第では)、「この人もことあり顔にや思はむ(惟光が少納言の顔を殿が君を犯した事を嘆いている顔と思いかねない)」など(ので、そうなつては)、あいなければ(かえって不本意なので)、いたう嘆かしげにも言ひなさず(然程嘆かわしくは言い做さなかった)。大夫(たいふ、惟光)も、「いかなることにかあらむ(如何いう事に成っているのだろう)」と、心得がたう思ふ(訝しく思った)。

参りて(惟光が帰って)、ありさまなど聞こえければ(源氏に様子を申し上げると)、あはれに思しやらるれど(源氏は若君を労しく思ったが)、さて通ひたまはむも(では通うかとなると)、さすがにすずろなる心地して(それは躊躇われる気がして)、「軽々しうもてひがめたと(思い付きで奇妙な真似をしていると)、人もや漏り聞かむ(誰が小耳に挟むか知れない)」など、つつましかければ(通いは憚られたので、この上は若君を当院に)、「ただ迎へてむ(迎え入れる他は無い)」と思す(とお考えになる)。

御文はたびたびたてまつれたまふ。暮るれば、例の大夫をぞたてまつれたまふ。「障はる事ども(外せない用事で)、え参り来ぬを(伺えませんが)、おろかにや(決して疎かには、思っておりません)」などあり。

「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば(明日急に御迎えに見えるとの御話しが御座いまして)、心あわたたしくてなむ(気忙しくしております)。年ごろの(長年住み慣れた)蓬生を(よもぎふを、田舎屋を)離れなむも(離れると言うのも)、さすがに心細く、さぶらふ人びとも思ひ乱れて(女房たちも不安で)」

と(と少納言は)、言少なに言ひて、をさをさあへしらはず(長々とは惟光の相手もせず)、もの縫ひ営む(何かと繕って用意する=引越支度に忙しい)けはひなどしるければ(有様などが明らかだったので)、参りぬ(惟光も早々に引き上げた)。

[第三段 源氏、紫の君を盗み取る]

君は大殿におはしけるに(源氏はこの日岳父左大臣家に様子伺いに出向いていたが)、例の(いつものように)、女君とみにも対面したまはず(正妻の女君は直ぐに出迎える事は無かった)。ものむつかしくおぼえたまひて(源氏は面白く無く御思いになって)、あづま(東琴=和琴)を菅搔きて(すががきて、流し弾きして)、「*常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて(とても雅な声で)、すさびるたまへり(口ずさんで居らした)。*原文注釈に依ると、「風俗歌」の「常陸」の一節。「ひたちにも たをこそつくれ あだごころ や かぬとやきみが やまをこえ あまよきませる」。本来、女性側から歌う内容であるが、源氏がこう歌ったのは皮肉なあてこすり、とある。で、歌の内容だが、「常陸にも田をこそ作れ(私が日立にいるのは田を耕す為なのに)徒心や(浮気ではないかと)予ぬとや(心配してか)君が山を越え(貴方はわざわざ此の遠い国まで)雨夜来ませる(泥かるむ道を遣って来なさる)」、という所か。是を歌うのが女でも男でも、恋人への宛て付けに成るとするなら、この歌にある君の心持が相手の気持ちなのだと言いつた、という事になる。という事は源氏が女君に、私の浮気を疑う貴方の気持ちは分かっているが、現にこうして私が此処に来ているのだから、機嫌を直して出て御出でませ、と言ったという解釈だ。其れも撰閲家の姫を脈絡も無しに無暗に田舎風に揶揄して、其れをまた殊更と雅に歌うことで、貴方にはそんな遣り方は似合わない、と言ったということか。だとしたら、そういう侮りは気位が高いと形容される姫君には逆効果で、源氏はよほど無神経か感性が変だ。この段のような場面転換の切り出しは、例えば情景描写一つにしても作者の企画を示す重要な言い回しとなるはずで、仮に誰かの仕種の客観報道だとしても、この解釈では腑に落ちない。解釈に困ったときに頼りになるWebサイトがある。野村竜夫という人の「源氏物語・伊勢物語・百人秀歌・論語・シェイクスピア・マルドローの歌全講義(<http://genji-id.hp.infoseek.co.jp/index.htm>)」というアップロードで、基本的に素直な解釈を豊富な知識から試みておられるようで非常に参考になる。今までも分かり難い場面を自分なりに考えて或る程度把握しかけても、何せ素人の曲解の恐れが多いので、このサイトで納得させられる事が多かった。特に今回は自分なりに考える事がまるで出来なかったので、全面的に此方の説に依拠したい。要点はこうだ。源氏はこの時に後ろめたい意図を持っている。兵部卿宮の妾腹若君の拉致である。拉致といっても、不完全ながら合意らしきものは在る。しかし、やはり社会慣習上の正式な手続きは取れない強欲が後ろめたい。そこで立場が悪くなる不測の事態も在り得たので、後ろ盾となる左大臣家の様子を確かめに来ていた。特に女君の機嫌は重要だった。この時点では何も具体的な問題は発生していないが、何かの時には女君に優しくしてほしいという源氏の虫のいい願望が思わず口を吐いた。「田をこそ作れ」は源氏が若君を女に育てる本心を卑しめてか農夫めかして吐露している、ということらしい。打ち明けるから分かって欲しい、とは如何にも男の身勝手そのもので、さすがに源氏も其の照れ隠しに殊更雅に歌ったという事だ。勿論、女君に源氏の意図が分かるはずも無く、この段は飽く迄も源氏の野心と不安を絢交ぜた心理描写だという事だ。良く分かる。やっとな腑に落ちた。要するに問題は、「常陸」という風俗歌に対する見方などではなくて、何故この日わざわざ源氏が「大殿」に来ていたか、という事であって、それは時系に沿って普通に読んで来れば、この日が源氏が姫の横取りを胸に秘めた決行日なのは明白だ、という事らしい。そして、こういう語り口で源氏の不穏な気配を表現している、という事になる。それは確かに納得は出来たが、然し私は思う。この日が、尼上が九月二十日に亡くなってから四十九日明けの十一月初めで、兵部卿宮が姫を迎えに来る日か、其の日が近付いている様な記述で、先に事態の緊張を示す工夫があっても良さそうだと。その方が源氏の不穏な動きを際立たせるし、理解もしやすい。「君は大殿におはしけるに」の書き出しに緊張感が読めなくも無いが、また単に緊張一辺倒の状況でもないという描写も分かる心算だが、何か別の書き方が在りそうな気がしてならない。読み解けなかった事もあるが、納得して読み直しても、やはりそう思う。

参りたれば(惟光が帰ってきたので)、召し寄せてありさま問ひたまふ(居間に呼び寄せて様子をお聞きに成る)。しかしかなど(是々然々と是光は、明日兵部卿宮が若君を迎え取りに来る運びとの事を)聞こゆれば(御報告致せば)、口惜しう思して(源氏は焦りを覚えられて)、「かの宮に渡りなば(宮邸に移ってしまわれたら)、わざと迎へ出でむも(正式に申し込もうにも)、好き好きしかるべし(奇妙と疑われる)。(藤壺宮に憚って事を内密に進めたいので、いっそ)幼き人を盗み出でたりと(幼女を盗み出したという)、もどき(位の罪なら)おひなむ(負おうではないか)。そのさきに(兵部卿宮が迎えに来る前に)、しばし、人にも口固めて(女房たちにも口封じさせて)、渡してむ(若君を院に移してしまおう)」と思して(と考えて)、

「暁かしこにもものせむ(未明に彼処に出向こう)。車の装束さながら(車はそのまま待たせて置け)。隨身一人二人仰せおきたれ(供は二人控えさせよ)」とのたまふ(と仰せになる)。うけたまはりて立ちぬ(是光は承って下がった)。

君(源氏は)、「いかにせまし(どうしたものだろう)。聞こえありて(噂が立って)好きがましきやうなるべきこと(変人のように見られるだろうか)。人のほどだにものを思ひ知り(若君があこの歳では、一人前に分別がつき)、女の心交はしけることと(女としての情を交した上での事とは)推し測られぬべくは(世間が先ず思わないのは)、世の常なり(当然だ)。父宮の尋ね出でたまへらむも(父宮が若君の居場所を探し出し為されたら)、はしたなう(極まりが悪く)、すずろなるべきを(居た堪れなくなるだろうに)」と、思し乱るれど(と思ひ悩みなされたが)、さて外してむは(さりとて此の機会を逸しては)いと口惜しかべければ(悔み切れないと)、まだ夜深う出でたまふ。

女君、例のしぶしぶに、心もとけずものしたまふ(打ち解けずに畏まったままで居らした)。

「かしこに(二条院の方に)、いとせちに見るべきことのはべるを思ひたまへ出でて(急用を思ひ出したので)、立ちかへり参り来なむ(一度帰って直ぐまた戻ります)」とて(と女君に簡単に言っただけで)、出でたまへば(お出掛けになったので)、さぶらふ人びとも知らざりけり(女房たちも源氏の出立に気付かなかった)。わが御方にて(源氏は自室で)、御直衣などはたてまつる(身支度を済まされた)。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ(そして惟光一人を先導の馬上の人として車を御出しに為られた)。

門うちたたかせたまへば、心知らぬ者の開けたるに(事情を知らない門番が開けたので)、御車をやをら引き入れさせて(御車を静かに邸内に引き入れさせて)、大夫、妻戸を鳴らして(部屋の戸を軽く叩いて)、しはぶけば(咳払いをすると)、少納言聞き知りて(少納言の乳母が源氏の来訪を察知して)、出で来たり。

「ここに、おはします(殿が御出です)」と言へば(と惟光が言えは)、

「幼き人は、御殿籠もりてなむ(若君はお眠りに成っています)。などか(どうして)、いと(こんな)夜深うは(よぶかうは、夜明け前の早くに)出でさせたまへる(御出でなのでしょうか)」と(と少納言は)、ものたよりと(忍び通いの帰りがけかと)思ひて言ふ(思つて言う)。

「宮へ渡らせたまふべかなるを(宮邸にお移り為されるようですが)、そのさきに聞こえ置かむとてなむ(其の前に御話しして置きたく)」とのたまへば(と源氏が話されると)、

「何ごとにかはべらむ(どういう御話しで御座いましょう)。いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ(どれほどしっかりお答え致し為されますものやら)」

とて(と言って少納言は)、うち笑ひてあたり(笑っていた)。君、入りたまへば(源氏が若君の寢室に入りなされると)、いとかたはらいたく(少納言はひどく困惑して)、

「うちとけて(だらしなく)、あやしき(見苦しい)古人(ふるびと、年取った女房)どものはべるに(たちが寝ておりますので)」と聞こえさす(と申し上げる)。

「まだ、おどろいたまはじな(まだ、お目覚めではないのですね)。いで、御目覚ましきこえむ(では、私が御起こし致しましょう)。かかる朝霧を知らでは、寝るものか(こんなに朝霧がきれいなのに、寝ていては)」

とて、入りたまへば(と言って源氏が寢所に入りなされるのを)、「や(いえ、お待ちを)」とも(とさえ)、え聞こえず(少納言は申せなかった)。

君は何心もなく寝たまへるを(源氏が無心に寝ていた若君を)、抱きおどろかしたまふに(抱き起こし為されたので)、おどろきて(若君は目を覚まして)、宮の御迎へにおはしたると(父宮が御迎えに見えたものと)、寝おびれて思したり(寝ぼけ眼に御思いになった)。

御髪(みぐし)かき繕ひなどしたまひて(源氏は若宮の御髪を撫で揃えながら)、

「いざ、たまへ(さあ、此方へどうぞ)。宮の御使にて参り来つるぞ(父宮の御使者として参ったのですよ)」

とのたまふに、「あらざりけり(父宮ではなかった)」と(のかと若宮は)、あきれて(意外さに驚いて)、恐ろしと思ひたれば(怖がられたので)、

「あな(なんだ)、心憂(こころう、嫌だなあ)。まろも同じ人ぞ(私も父宮と変わらないのに)」

とて(と言って)、かき抱きて出でたまへば(源氏は若宮を抱き上げて寢所から出て来為されたので)、大輔(たいふ、大夫=惟光)、少納言など、「こは、いかに(これは、一体何事ですか)」と聞こゆ(と申し上げる)。

「ここには、常にも(いつもとは)え参らぬが(とても御寄り出来なかった事が)おぼつかなければ(気掛かりだったので)、心やすき所にと聞こえしを(気兼ねなく過ごせる所にとお誘い申し上げましたが)、心憂く(残念ながら)、渡りたまへるなれば(宮邸にお移り為されれば)、まして聞こえがたかべければ(ますます御申入れし難くなってしまうので、我が邸に御連れ致し申します)。人一人参られよかし(誰か一人付いて来るが良い)」

とのたまへば、心あわたたしくて(少納言は慌てて)、

「今日は、いと(本当に)便なくなむはべるべき(不都合なので御座います)。宮の渡らせたまはむには(父宮が御迎えに見えたら)、いかさまにか聞こえやらむ(如何申し上げましょう)。おのづから、ほど経て(年月を経て)、さるべきにおはしまさば(そうなったのなら)、ともかうもはべりなむを(ともかくも)、いと(このような全く)思ひやりなきほどのことにはべれば(無体な為さり様では)、さぶらふ人びと苦しうはべるべし(御仕えする者の立場が御座いません)」と聞こゆれば(と申し上げれば、源氏は)、

「よし(ならば)、後にも(のちにも、後からでも)人は参りなむ(付き人は参れば良い)」とて、御車寄せさせたまへば、あさましう(女房たちは驚いて)、いかさまにと思ひあへり(どうなってしまうものかと案じ合った)。

若君も、あやしと思して泣いたまふ(不安で御泣きになった)。少納言、とどめきこえむかたなければ(もはや源氏を止める事は出来ないと見て)、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて(昨夜用意した引越し用の道具を纏めると)、自らもよろしき衣着かへて(自らも余所行きに着替えて)、乗りぬ(車に乗った)。

二条院は近ければ、まだ明うも(あかうも、明るくも)ならぬほどにおはして(成らない内に到着して)、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。

少納言、

「なほ、いと夢の心地しはべるを(まだ、夢のようです)、いかにしはべるべきことにか(どうしたらいいのでしょうか)」と、やすらへば(と下車をためらうと)、

「そは、心ななり(それは、お任せします)。御自ら(私が気掛かりな若君御自身は)渡したてまつりつれば(御連れ致しましたので)、帰りなむとあらば(あなたは帰ると言うなら)、送りせむかし(送らせもしますが)」

とのたまふに(と答えなざる源氏の腹の据わりように)、笑ひて下りぬ(符と安堵して苦笑しながら車を降りた)。にはかに(しかし途端に)、あさましう(この異常な事態に)、胸も静かならず(狼狽した)。「宮の思しのたまはむこと(宮様は如何思い何と仰せになるだろう)、いかになり果てたまふべき御ありさまにか(若君の行く末はどうなるのだろう)、とてもかくも(何にしても)、頼もしき人びとに(頼ってきた人たちに)後れたまへるがいみじさ(先立たれた事が劳しい)」と思ふに、涙の止まらぬを、さすがにゆゆしければ(そうしては前途に不謹慎かと)、念じみたり(思いだけは胸に秘めて涙を抑えた)。

こなたは住みたまはぬ対なれば(此方は普段使っていない建物なので)、御帳などもなかりけり(間仕切りの簾なども設けられていなかった)。(源氏は)惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたり(その場その場に応じて)仕立てさせたまふ(設置させ為された)。(部屋の模様が整って、後は)御几帳の帷子(かたびら、垂れ幕)引き下ろし、御座など(畳は敷いてあるので後は座布団を)

ただひき繕ふばかりにてあれば、東の対に、御宿直物(おんとのみもの、寝具寝巻き)召しに遣はして(取り寄せに人を遣わせて)、大殿籠もりぬ(御休みになられた)。

若君は、いとむくつけく(とても気味悪く)、いかにすることならむと(どうなってしまうかと不安で)、ふるはれたまへど(震えて居為されたが)、さすがに声立てても(声を上げてまでは)え泣きたまはず(御泣きに為らなかった)。

「少納言がもとに寝む(少納言の所で寝る)」

とのたまふ声、いと若し(と仰る声は本当に幼かった)。

「今は、さは大殿籠もるまじきぞよ(もう乳母の添寝はおかしいですよ)」

と教へきこえたまへば(と源氏が御諭し為されると)、いとわびしくて泣き臥したまへり(寂しさの余り泣き寝入り為された)。乳母はうちも臥されず(少納言はとても横に為れず)、ものもおぼえず起きゐたり(ただ呆然と一睡もせず起きていた)。

明けゆくまに、見わたせば、御殿(おとど、建物)の造りざま(の重厚な造り)、しつらひざま(装飾の華美)、さらにも言はず(言うまでも無く)、庭の砂子(すなご、敷き砂)も玉を重ねたらむやうに見えて(粒揃いに白く美しく)、かかやく心地するに(二条院の優雅な佇まいに)、はしたなく思ひゐたれど(少納言は気が引ける思いだったが)、こなたには女などもさぶらはざりけり(この西の対には女房たちは控えていなかった)。け疎き(けうとき、儀礼上の)客人(まらうと)などの参る折節の方なりければ(迎えるだけの殿だったので)、男どもぞ御簾の外にありける(男たちだけが縁側で控えていた)。

かく(それが斯く改まって此処の西の対に)、人迎へたまへりと(源氏が人を招き入れたと)、聞く人(聞いた者どもは)、「誰れならむ(誰だろう)。おぼろけにはあらじ(徒事では無いだろう)」と、ささめく(ささやき合う)。御手水(みてうづ、洗面用の水)、御粥(おんかゆ、朝食)など、こなたに参る(なども運ばれて来た)。日高う寝起きたまひて(源氏は日が高くなってから御起きに成ったのだが、少納言に)、

「人なくて(女房たちが居ないでは)、悪しかめるを(不便だろうから)、さるべき人びと(相応しい者を)、夕づけてこそは(様子を見て夕方にでも)迎へさせたまはめ(迎えに遣りなさい)」

とのたまひて(と仰って)、対に童女召しにつかはす(東の対には童女を呼びに人を遣わし為される)。「小さき限り(小さい子ばかりを)、ことさらに参れ(選んで呼べ)」とありければ(とあったので)、いとをかしげにて(特に可愛らしい子が)、四人(よたり)参りたり(遣って来た)。

君は御衣にまとはれて臥したまへるを(源氏は着物に包まって寝ていた若君を)、せめて起こして(揺り起こして)、

「かう、心憂くなおはせそ(そう嫌々されますな)。すずろなる人は(ただの酔狂で)、かうはありなむや(このように世話を焼くものですか)。女は心柔らかなるなむよき(女は素直に従がうのが良いのですよ)」

など(などと)、今より教へきこえたまふ(今からお教え申しなさる)。

御容貌は(若君のお顔立ちは)、さし離れて見しよりも(離れて見ていた時よりも)、清らにて(美しく)、なつかしううち語らひつつ(源氏は親しく御話ししながら)、をかしき絵(楽しそうな絵やら)、遊びものども取りに遣はして(玩具などを童女に持って来させては)、見せたてまつり(若君に御見せ為さって)、御心につくことどもをしたまふ(ご機嫌を取られた)。

やうやう起きみて見たまふに(若君もだんだん自分から起き出して座っては辺りを御覧になったが)、鈍色(にびいろ、鼠色の喪服)のこまやかなるが(の色は深い)、うち萎えたるどもを着て(柔かそうな着物で)、何心なく(あどけなく)うち笑みなどしてゐたまへるが(馴染んで微笑んで居なさるのが)、いとうつくしきに(とても可愛いらしくて)、我もうち笑まれて見たまふ(源氏も笑顔で御覧になる)。

東の対に渡りたまへるに(源氏が東の対に行ってしまうので若君は)、立ち出でて(寝所から出て)、庭の木立(木立の造園や)、池の方など(池の姿などを)覗きたまへば(御簾の間から覗き身なさると)、霜枯れの前栽(霜枯れでさっぱりと整った前庭の植え込みが)、絵に描けるやうにおもしろくて(絵に描いたように美しく)、見も知らぬ(見た事が無かった)四位(しゐ、黒装束の役人)、五位(ごゐ、赤装束の役人)こきまぜに(混じり合って)、隙なう出で入りつつ(途切れる事無く出入りする様子に)、「げに、をかしき所かな(何て華やかな所かしら)」と思す(と御思いになった)。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ(其処此処の屏風に描かれた見事な絵を見ながら)、慰めておはするも(気を晴らして御出でなのも)はかなしや(他愛なかった)。

君は、二、三日(源氏は二日三日と)、内裏へも参りたまはで(御所へ伺候もなさらず)、この人をなつけ語らひきこえたまふ(若君を手懐けようと御相手申し上げる)。やがて本にと思すにや(それを手本に見立ててか)、手習(てならひ、習字)、絵など(お絵描きなどを)さまざまに書きつつ(色々と描きながら)、見せたてまつりたまふ(お教え為された)。いみじうをかしげに(どれも楽しそうな)書き集めたまへり(物ばかりだった)。「*武蔵野と言へばかこたれぬ」と、紫の紙に書いたまへる墨つきの、いとことなるを(其の色の鮮やかさが特に印象的だったので若君は)取りて見ゐたまへり(手にとって御覧になって居らした)。すこし小さくて(すると其処には少し小さな字で)、*原文注釈に依ると、≪『源氏積』は「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」(古今六帖第五 紫)を指摘。その第四句の文句。≫、とある。引歌は、何かを引き継いでなのだろうが、「其れに付いては知らないが、武蔵野と言へば愚痴も出る、思うようにならない女を準えた紫草の産地だからだ」、という字面。「よしや(なとなれば)さこそは紫の由縁(それは紫だから)」の<紫>が何故<悲恋>となって、何故その<紫>だけで<武蔵野>の印象が決まるのかに付いては、更に悲恋の経緯を歌った引歌が在るらしいが、省く。紫の紙を見て、源氏が古歌を思い出して書いた、という情景に見流して置きたい。どうせ若君には意味不明なのだから。

「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の、露分けわぶる草のゆかりを」(和歌 5-24)

「遠い武蔵野の紫も、此処では綺麗な色で咲く」(意識 5-24)

*「ねはみねど」は「根は見えないが」と「未だ抱いて寝て確かめては居ないが」。「あはれとぞおもふ」は「成長を願う」と「労しい」。「むさしのの」は「遠い武蔵国の野原に」と「紫の人が」。「つゆわけわぶる」は「未だ分け入っては行けないが」と「寂しさに泣くのを」。「くさのゆかりを」は「深く偲んでいる」と「縁を論じて癒したい」。初冬の情緒といっても、「根は見ねど」の歌い出しでは強い思いが滲んで、とても情景は浮かばない。もう一意は素直だが、如何言っても子供には分からない。

とあり(と書かれてあった)。

「いで、君も書いたまへ(さあ、君も書いてごらんさい)」とあれば(と源氏が促されると)、
「まだ、ようは書かず(まだ、上手く書けません)」

とて(と言って)、見上げたまへるが(若君が源氏を見上げ為されるのが)、何心なくうつくしげなれば(無邪気で可愛いくて)、うちほほ笑みて(源氏は思わず微笑んで)、

「よからねど(上手くないからと言って)、むげに書かぬこそ悪ろけれ(何も書かない事こそいけません)。教えきこえむかし(教えてあげましょう)」

とのたまへば(と仰ったが)、うちそばみて(手本を横に見て)書いたまふ手つき(お書きになる若君の手付きの)、筆とりたまへるさまの幼げなるも(筆遣いの覚束なさも)、らうたうのみおぼゆれば(ただただ労しく)、心ながらあやしと思す(我ながら幼子相手の楽しさを奇妙に御思いになった。そして若君が)。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば(敢えて御覧になると)、

「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな、いかなる草のゆかりなるらむ」(和歌 5-25)

「覚束なさすら覚束な、何の武蔵野、何の紫」(意識 5-25)

*「不満の理由を知らないので武蔵野の事は分かりません、紫草に如何言う謂われが在るのでしょうか」という音節韻だけの内容だが、若君は元歌の意味が分からないのだから、歌を返す筈も無い。是は、源氏の自問自答を手本にして、若君が手習ったもの。若君は、習字に託けた源氏の一人遊びに否応無しに付き合わされた、事になる。

と、いと若けれど、生ひ先見えて(行く末の大様さが窺える)、ふくよかに書いたまへり(ふっくらとした字体だった)。故尼君のにぞ似たりける。「今めかしき手本習はば(今時の新しい手本で練習すれば)、いとよう書いたまひてむ(とても上手になるだろう)」と見たまふ。

雛(ひひな、紙人形あそび)など、わざと(わざわざ)屋ども作り続けて(家を幾つも作り続けて)、もろともに遊びつつ(一緒に遊んでいると)、こよなき(源氏にとっては若宮と人形が之の上ない藤壺の身代わりに成ったので)もの思ひの紛らはしなり(憂さ晴らしであった)。

かのとまりにし人びと(さて若君が居た故按察大納言邸に残った女房たちだが)、宮渡りたまひて、尋ねきこえたまひけるに、聞こえやる方なくてぞ、わびあへりける(父宮が迎えに見えて若

君の居場所をお尋ねになっても答え様が無く困り果てていた)。「しばし、人に知らせじ(暫くは誰にも言うな)」と君ものたまひ(と源氏の君が仰せになり)、少納言も思ふことなれば、せちに口固めやりたり(厳に口を割らなかつた)。ただ、「行方も知らず、少納言が率て(みて、若君を引き連れて出て)隠しきこえたる(隠したようです)」とのみ聞こえさするに(とだけ申し上げていたので)、宮も言ふかひなう思して(宮も之の上は女房たちを責めても如何にも為らないと御思いに成って)、「*故尼君も、かしこに(むこうに=宮邸に)渡りたまはむことを(お移りに為る事を)、いともものしと(とても嫌って)思したりしことなれば(御出でだった事為れば)、乳母の、いとさし過ぐしたる(ひどく出過ぎた)心ばせのあまり(気掛かりに思い余って)、おいらかに(普通に)渡さむを、便なし(移るのは良くない)、などは言はで(などと言わずに)、心にまかせ(勝手に)、率て(連れ出して)放らかし(はふらかし、流浪させて)つるなめり(しまうのだろうか)」と、泣く泣く帰りたまひぬ。「もし、聞き出でたてまつらば、告げよ」とのたまふも(という宮の仰せも)、わづらはしく(女房たちには少納言の手前は負担だった)。僧都の御もとにも(宮は北山の僧都の所にも若君の行方を)、尋ねきこえたまへど(お尋ねになったが)、あとはかなくて(手掛かりは無く)、惜し(あたらし、惜し)かりし(まれる)御容貌など(若君の面影を)、恋しく悲しと思す。

*作者が此処で大概の<此の事件のまとめ>を述べているので、私も少し整理しておきたい。基本的に<此の誘拐事件>は源氏の意地汚さから起こっている。<夕顔=常夏>との情交もそうだったが、源氏は遣る瀬無い宿縁を趣きある女に求めて、其の遣る瀬無さを<生きる手応え>にしたがる。この兵部卿宮の妾腹の子も、この子自身の可愛いさも然り乍ら、元々は藤壺の面影を其の趣きとして拘っている。誘拐ばかりか、近親相姦、帝への背信、などと源氏は重罪を重ねている。だというのに、この話は犯罪者の逃亡記では無い。夕顔は右大臣家、延いては頭中将から逃げていた。この兵部卿宮の妾腹の子も、其の育ての親であった尼君が兵部卿宮の北の方を嫌っていた。尼上は宮の妾腹に甘んじた我が娘が、宮の北の方に責められて病苦の果てに早世した、とっていたからだ。少納言の乳母は故尼上の遺志を尊んで北の方の許に引越す事を拒んだ、と兵部卿宮は理解した。こうした女側にある正規の後見筋から逃れようとする事情が、然し乍ら其等は決して源氏の正当性を意味し得るものではないが、事実上で社会的犯罪性を曖昧にさせてしまう。とはいえ其の実効には無論、源氏の圧倒的地位の高さが事態の物理性を支えていてこそその事ではあるが、それでも少なくとも物語上の破綻は逃れている。こうした設定は所謂メロドラマの常套手段だし、話とするのに面白いからではあるのだろうが、私には作者周辺の其れ以上の意図があるように思えてならない。詰まり、物事には良し悪しはあるが、良し悪しの前に不条理の結果としての現状がある。済し崩しを起こしてしまう物性もあれば、其の済し崩しがあつてこそ存在している個性もある。其の多様性を無視して教条だけで世の中を統べようとしても机上の空論に過ぎない、という所か。何も之が主題とは思わないが、少なくとも其の主張はあると思う。そして之の事は、当時より管理性能が格段に良くなったと思われている現代社会に於いてこそ、よく考えてみるべき世の中の本質とも思われる。特に、枕絵研究で功績の高い福田和彦氏が指摘する、性戯の手解きと情緒の保全を組み込んだ社会制度の喪失を危惧する、という思いは、文化面でも社会制度としても其の精緻な多方面の専門家による分析こそが待たれるが、昨今の潤いの無い生活感から大いに同感する所だ。この思いが、この物語に対する私の基本的な読み方にある。

北の方も(宮の正妻も)、母君(若君の亡き母君)を憎しと思ひ(を嫉妬して)きこえたまひける(居らした)心も失せて、わが心にまかせつべう(自分の意に沿うように若君を育て上げようと)思しけるに違ひぬるは(思惑を持っていたのに期待はずれと成ってしまった)、口惜しう思しけり(残念がって居らした)。

やうやう人参り集りぬ(次第に二条院西の対に以前の女房たちも集まり揃った)。御遊びがたきの童女(わらはべ)、児ども(ちごども、若君の遊び相手の子供たちは)、いとめづらかに今めかしき御ありさまもなれば(二条院のとても贅沢で晴れやかな暮らしぶりを)、思ふことなく遊びあへり(素直に喜んで遊び合っていた)。

君は(西の対の女主人となった若君は)、*男君のおはせずなどして(殿の源氏が留守などして)、さうざうしき夕暮などばかりぞ(物足りない夕暮れなどだけこそ)、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど(尼君を恋しがって涙されたが)、宮をばことに思ひ出できこえたまはず(父宮は殊に思い出される事は無かった)。もとより見ならひきこえたまはで(元々別に暮らして)ならひたまへれば(馴染みも無かったので)、今はただこの後の親(のちのおや、親代わりの源氏)を、いみじう(偏に)睦びまつはし(親しく懐いて)きこえたまふ(頼りに為された)。ものよりおはすれば(源氏が外出からお帰りに成ると)、まづ出でむかひて(真っ先に御出迎えして)、あはれにうち語らひ(親しく御話しして)、御懐に入りみて(御膝の上に入って座り)、いささか疎く恥づかしとも思ひたらず(其れを少しも変にも気が引けるとも思い至り為されない)。さるかたに(そういう事で言えば)、いみじう(戯れを戯れとも思わない)らうたきわざなりけり(無邪気な振る舞いなので御座いました)。 *源氏を「男君(をとこぎみ=夫君)」と敢えて呼ぶ事で、主語の「君」を西の対の女主人たる「女君=夫人」と明示した。

賢しら心あり(さかしらごころあり、若君に知恵が付いて)、何くれと(何かと)むつかしき筋になりぬれば(ややこしい気持ちがあれば)、わが心地もすこし違ふふしも出で来やと(源氏の方も違う思惑にもなって来て)、心おかれ(相手も気を回して)、人も恨みがちに(恨み言や)、思ひのほかのこと(行き違いが)、おのづから出で来るを、いと(そうならないのは実に)をかしきもてあそびなり(面白い趣向だった)。女など(むすめなど)はた(というものは)、かばかりになれば(此れ位の歳になれば)、心やすくうちふるまひ(実の娘でも馴れ馴れしくは)、隔てなきさまに臥し起きなどは(共の寝起きなど)、えしもすまじきを(とても出来ない所だが)、これは、いとさまかはりたる(本当に奇妙な)傳き種なりと(かしづきぐさなりと、面倒見甲斐の在る者と)、思ほいためり(源氏は御思いに為っていたようです)。

(2009年3月13日、読了)